

弘化前半期における琉球問題と長崎警備の一考察

長
野

暹

はじめに

一、弘化期における外国船来航情報

(一) 琉球への外国船来航情報

(二) フランス船長崎入港情報

(三) 五島沖・対馬沖の外国船情報

(四) 津軽沖の異国船情報

二、琉球への外国船来航と島津斉彬

(一) 弘化二年について

(二) 島津斉興への官位申請と島津斉彬

三、佐賀藩の対応

(一) 弘化元年について

(二) 弘化二年について

むすびにかえて

はじめに

アヘン戦争での清国の敗北は、従来の東アジア秩序に大きな転換をもたらした。清国は香港の割譲、上海など五港の開港、軍事費一二〇万ドルの賠償金支払などによって大きな打撃を受け、以後、西欧列強の清国内進出を受けるようになった。東アジアにおいて、西欧列強は北進化を進め、それが日本に及んできた。これ以前、文化五年（一八〇八）八月にイギリス軍艦フエートン号が長崎に侵港した事件は、幕府や佐賀藩に大きな衝撃を与えたが、それ以後、外国の軍艦が来日することがなく、一時的な騒動に終った面があった。しかし、アヘン戦争後は、列強による進出が常態化する状況になってきた。アヘン戦争直前には、天保九年（一八三八）に稿がなつたとされる古賀侗庵の「海防憶測」のように海防問題が論じられていたが、アヘン戦争以後、海防問題がさらに大きく取りあげられ論議されるようになった。このような状況の中で、天保十五年（一八四四）七月二日にオランダ軍艦バレンバン号が長崎に来港し、使節コープスが幕府に開国を勧告したオランダ国王の親書を提出したことは、劇的な転換を迫るものであり、海防問題ひいては幕府政策の根幹であった鎖国体制が問われたことであった。また、弘化三年（一八四六）七月に孝明天皇が幕府に対して海防強化を求めたことは、従来の朝幕関係からすれば、大きな変化であった。弘化三年五月にはアメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルが軍艦二艦を率いて浦賀に来航して通商を求め、同年六月にはフランスのインドシナ艦隊司令官セシユーが長崎に来港して、薪水の供与を求めるなど、西洋軍艦の来日の頻度が高まつた。

これらの動きに対して、幕府は弘化二年（一八四五）七月に海防掛を設け、海防政策の立案と江戸湾の防備体制を強める措置をとった。

弘化期は、以上のようなことからして、アヘン戦争によって従来の東アジアの秩序が崩壊して変動をきたし、そ

の中で、開国の勧告という幕府の基本政策が変更を迫られたことに象徴されるように、大きな転換期であった。⁽⁴⁾この転換期において、諸藩がどのように対応したかを検討することは、東アジアひいては新しい国際関係形成の動きを解明する上で肝要なものとみなされる。そこで本稿は佐賀藩と薩摩藩をとりあげ、以下の事項について検討してみよう。

一つは、佐賀藩での弘化期の外国船来航に関する情報収集とその対応についてである。アヘン戦争について、佐賀藩が情報収集に努めていたことは、現存する史料では諸藩の中でも佐賀藩の収集度が高いとの指摘からも裏付けられる。⁽⁶⁾これは対外情報について強い関心を持っていたことをしめすものであるが、弘化期における外国船来港の情報入手の内容を検討することによって、対外認識の在り方を窺うことができるであろう。

二つは、アヘン戦後に列強の進出を蒙ったのが琉球であった。この琉球への外国船来航の情報入手の内容とその対応を検討し、琉球を通じての変動の解明である。

三つは、琉球問題に対する薩摩藩の動向を検討することである。これは琉球を属国扱いしながらも、清国への朝貢を認めていた薩摩藩が、アヘン戦争による東アジア秩序の崩壊で琉球を通じてどのように新しい事態に対応しようとしたかの考察である。この場合、島津斉彬の書翰を中軸に検討してみよう。

四つは、弘化前半期における佐賀藩の長崎警備の在り方を検討することである。佐賀藩は長崎警備について、従来の内目を中軸にしたものから外目の防備の強化策をとった。これは福岡藩や幕府の方針と異なるものであった。

佐賀藩が外目に重点を置く防衛体制策を打ち出した要因を検討することは、佐賀藩が以後、外目台場を増築し、そこに配備する鉄製大砲鑄造のために、反射炉を築設していた動きの基本視点の解明に繋るものとみなされる。以上のような視点を基軸にして解明していこう。

注(1) 「鍋島直正公伝第一編」(侯爵鍋島家編纂所、大正九年八月、一三七、一五八頁参照。

(2) 前掲書、第三編二〇〇—二〇四頁、梅澤秀夫「近世後期の朱子学と海防論—古賀精里、侗庵の場合—」(近代日本研究会「幕末維新の日本」山川出版社、一九八一年所収)、清水教好「対外危機と幕末儒学—古賀侗庵『海防憶測』をめぐる一考察」(衣笠安喜編『近世思想史研究の現在』思文閣出版、一九九五年所収)、前田勉『近世日本の儒学と兵学』(ベリカン社、一九九六年五月)三九六—四二五頁。

(3) この折の軍艦の警備などについては、原 剛『幕末海防史の研究—全国的にみた日本の海防態勢—』(名著出版、一九八八年)一一頁参照。

(4) 松田隆行「弘化・嘉永期における異国船取扱方と打払令復活問題—阿部政権期における江戸内海防衛策をめぐって—」(明治維新史学会編『明治維新と西洋国際社会』吉川弘文館、一九九九年所収)。この期についての文献が詳述されている。

(5) 梶原良則「弘化期の長崎警備について」(福岡大学人文論叢』二六—四、一九九五年)、同「長崎警備と弘化・嘉永期の政局」(中村實編『開国と近代化』吉川弘文館、一九九七年所収)。

(6) 向井 晃「海外情報と九州」(杉本 勲編『近代西洋文明との出会い—黎明期の西南雄藩』思文閣出版、一九八一年所収)。

一、弘化期における外国船来航情報

(一) 琉球への外国船来航情報

弘化二年(一八四五)五月にイギリス船が琉球に来航し、通商を求めたことは、外国船の日本接近を印象づけた。イギリス船は天保十四年(一八四三)十月にも琉球八重山諸島を測量していたが、今度は那覇に来港し、貿易を要求する緊迫した事態であった。この情報を佐賀藩がどのように入手していたかは、対外的危機の認識を検討する上で重要なことなので、以下、若干検討しておく。

「弘化貳年巳六月十八日廻達写」がある。⁽¹⁾以下、これについて検討しよう。

一筆致啓上、去月十五日琉球国那覇川口江異国船一艘渡来卸碇一件ニ付、昨十五日薩州家老中より別紙之趣御奉行所届出相成、段彼聞役方廻達有之。

とある。これによれば、長崎奉行所にイギリス船が琉球に五月十五日に来航した旨が薩摩藩から届けられたのは六月十五日ということになる。佐賀藩の長崎聞役米倉権兵衛は、この情報を六月十五日付の書面で佐賀に報告している。

弘化二年六月十六日には、長崎奉行遠山半左衛門、伊沢政義が幕府老中阿部正弘など四人宛に出した書状を米倉権兵衛は六月十六日の書状で「江戸参上之写内密筋申入置付（中略）別紙唯今内密筋手ニ入付写之差越申上」と報告している。その内容は左のようであった。

琉球国那覇川口江去月十五日異国船壹艘致来着付、役々差出相尋付、言語ニ者不通得共、右船中唐人老人乗組罷在啖咭喇国之船ニ而本船ニ石火矢等有之得共、矢船と者不相見趣、然処去辰年三月佛朗西国之船致渡来付儀共相尋付、形行相答当七月頃啖国之船今壹艘来着可有之ニ付、其節野菜等及所望上者相与具付様申上付、何様之訳ニ而可致渡来哉と相尋付、諸方海之中途汐荒ニ而何茂子細者無之段申聞付、且食料之義申出付間、任望相与付、従是日本江致渡海付段申置、当月十七日那覇川口致出帆付段、従琉球届来付旨、松平大隅守方申越之事

とある。五月十五日に外国船が那覇川口に来航し、それはイギリス船で、来航は特別な理由もないので、食料を与へたことを薩摩藩主から報告があった旨を記している。

イギリス船の那覇来航のことを佐賀藩は六月十五日に長崎聞役の通報で入手した。福岡藩も同様であったが、長崎御番の關係で警備体制の問題があった。イギリス船は那覇を出航したが、さらに別の船が来航する旨が伝えられ、この対応が問題になった。

尚七月ニも今尙艘来着可致旨申置い趣ニ者い得共、格別子細も無之趣ニ而委細者薩州聞役方廻達ニ而承知も可有之、就右而者比節柄之義ニ者い得共、前断之通格別子細も無之趣ニ付、別段御手当増之御人数等被差出いニ者決而不相及且於御国許も必人氣不立様有之度い、とあり、特別な対策はとらないでよいとしている。

その後、イギリス船はサマラング号が弘化二年（一八四五）七月三日に長崎に来航し、長崎湾内を測量したのち、七月八日に長崎を出港した。⁽²⁾

弘化三年（一八四六）閏五月十四日に、米倉権兵衛から琉球那覇にイギリス船とフランス船が来航した旨の届け出が薩摩藩家老から出されたことが報告され、その書状には届書が添付された。その内容は次のようであった。⁽³⁾

当四月五日琉球国之内那覇沖江異国船尙艘渡来卸碇い付、役々差越相尋い処、異国人者言語文字不相通、唐人或人乗組居咲咭喇国之船ニ而船中捨四人外船頭之医者尙人、右之妻尙人、男子尙人、女子尙人右之唐人或人都合或拾人乗組、廣東より差越い旨申出、外子細不申聞橋船上陸可致滞留い付宿借受度願出不相成国法之趣申聞い処、本国皇帝之命を受差越い付、地方買取致住居度申出、尚以不相成趣頻ニ相断い得共、更ニ不聞入、医者尙人、右之妻子尙人、男子尙人、女子尙人、唐人尙人都合五人上陸荷物等卸シ置、同八日未刻西ノ方江向本船ハ致出帆いと記されている。四月五日に琉球那覇にイギリス船が来港し、滞留の申し出をして五人が上陸した旨が述べられている。

弘化三年五月十一日と十二日にフランス軍艦が那覇に来港したことを薩摩藩家老が長崎奉行に報告した。その書翰写を添えて、米倉権兵衛は閏五月二十二日付で佐賀に報告した。

（前略）^(四)同十一日那覇沖江異国船尙艘相見得運天之様乗来、同十三日同所湊江卸碇い付、役々差越相尋い処、言語文字不相通、佛朗西国之船三百人乗与、廣東より出帆致来着い方手様等を以漸相通シ、石火矢等載付有之、前条同

断昼夜勤番堅取締申付置い、同十二日那覇沖江異国船壹艘渡来(中略)相尋い処、佛朗西国之船五百人大総兵乗組
廣東より渡来之旨手様等を以漸相通シ(中略)十三日は又運天湊江卸碇、石火矢等載付有之

とある。⁽⁴⁾四月十一日に三〇〇人を乗せたフランス軍艦一艘が那覇湊に来航し、十三日には碇をおろして停泊した
と、また、五〇〇人乗のフランス軍艦が十二日現われ、十三日に碇をおろしたことが記されていた。つづいて次の
ように記している。

大総兵ハ琉球総理大臣江致面会、和平之事申談度申出い得共、其段者追而可及返答旨相達置い、尤面会之節和好
通商之儀共何様難渋申懸い而も及理解無異儀為致帰帆い様可取計、猶々委細之儀者追々可申越旨琉球より飛船致仕
立申越い事

とある。⁽⁵⁾琉球王に面談の折は和平通商のことが申し出され、後日通知するとして、出港する手立を講じるとしてい
る。

廣東からフランス軍艦二艘が那覇に来港し、国交のことを申し出ていたことが報じられている。那覇にフランス
軍艦が来港したのは弘化三年五月十一日と十二日であった。この旨を薩摩藩より長崎奉行に届け出たのは閏五月二
十一日であった。

弘化二年のイギリス船の那覇来港に比べて、弘化三年のフランス軍艦の来港は、規模も大きく、国交の問題が琉
球王に提起されたことなどで、より対外関係が緊迫してきたことを知らせる内容のものであった。

那覇へのイギリス船来航の情報を入手しているが、特別な対抗措置をとっていない。来航のことを知りながら、
緊張した対応をしていない。

以上のように、琉球への外国船来航の情報を佐賀藩は長崎聞役から入手している。琉球ということもあつてか特
別な対策を講じていない。しかし、度重なる外国来航の情報は緊張を強め、とりわけ長崎警備の在り方について検

討を要することを実感させたとみなされる。旧来の東アジア秩序が崩壊し、列強の進出によって新しい状況が生み出されていることが、長崎開役の情報通報で認識されるようになった。アヘン戦争が東アジア社会に大きな変動を及ぼしていることが、情報入手の在り方から窺うことができる。まさしく新しい段階に東アジアが入ったことを示している。

(二) フランス船長崎入港の情報

弘化三年六月六日にフランス船三艘が長崎に入港した。この折の状況について検討しておこう。

弘化三年六月に長崎開役米倉権兵衛から注進があった。

謹而奉言上候、今六日朝白帆船壹艘相見候、深堀遠見所合図之鷹移来候付、先以御奉行所江注進仕候、且野母方之合図筒をも順打有之候、右之趣宣預御披露、猶里数方角等之儀者追々可申上候、恐々謹言

と、⁽⁶⁾六月六日朝に外国船三艘が来港していることを深堀の遠見番所から連絡があった旨を伝えている。

佐賀藩は外国船が三艘と数が多いことから、長崎警備については「御備向之儀厳密被仰付」としている。⁽⁷⁾

米倉権兵衛は、情報が入り次第順次報告している。二番目の通報では「白帆船追々海岸乗寄、検使紮方之上異船ニ相決候」⁽⁸⁾と通商のない外国船であることが決められた旨を伝達している。

第五番注進では、

白帆船例よりハ船数多甚以御案之筋ニ付、南御番所御台場々々御備向等之儀改而被相達ニて無之候得者尚又被入御念厳密之御手配相成居候様ニと御用人を以被御申聞

と長崎奉行から特に改めるの指示はしないが、台場の警固を厳重にするようにとの伝達があった旨を報じている。⁽⁹⁾

第六番注進では、鍋嶋直正の出崎を求めている。

少将様御越之御振合私に内沙汰之趣と被成御承知、右者例と相変候船数之儀と申、御当番之御事ニ茂候得者早
く御出崎成方可然被成御心得段旁以直衛被御申聞候

⁽¹⁰⁾と長崎警備担当の年でもあり、外国船数も多いとして鍋嶋直正の出崎を求めている。

第八番注進では

白帆船三艘今六日卯申刻天堤山沖末之方里数凡四拾里程相見候段鍋嶋孫六郎家来方追申達候

⁽¹¹⁾と三艘の外国船が天堤山沖に来たことを告げている。

六月七日に米倉権兵衛は異国船が伊王嶋附近を乗り廻していることを伝えた。⁽¹²⁾

右船段々乗寄今七日昼九半時比伊王嶋乗廻候段香焼遠見所より及注進候

異国船と確定したことから、非番の福岡藩にも「御非番方人数船等差出候付」と出動が命じられた。

外国船であるが、まだこの国の船であるかが判明していなかった。

沖出之者相糺い処、商買船ニ無之全異船ニ相違無之旨、尤何連之国仕出し渡来之否一向不相分候得共、先佛羅亜

国英国之船所等相見候趣只今申越候

⁽¹³⁾と、フランス船かイギリス船らしいとの認識段階であつた。

六月九日には鍋嶋直正は出崎する旨を「私儀も追付罷越候段対馬守江申達置候」⁽¹⁴⁾と伝えている。

長崎奉行所は佐賀藩聞役を呼び出し状況を伝えた。

一昨七日フランス国之船三艘渡来ニ付被相糺候処、当四月中唐国致出帆、琉球国江罷越帰帆之海上水野菜乏敷、

右品乞請渡旨申立

⁽¹⁵⁾と、外国船がフランス船であること、清国を四月に出帆して琉球に到り、帰途の水や野菜が欠乏してきたので、これらを求めて渡来したことが知らされた。この折、鍋嶋直正は出崎の途中にあつたが、奉行所の通報を得た旨を同

日長崎奉行所に伝えた。

六月六日にフランス船は「昨九日致出帆候⁽¹⁶⁾」と出港したことが告げられた。

ところで、フランス船は八日に書状を長崎奉行に出していた。これが九日に翻訳され、それが知らされた。この中で「数年来フランス国船日本海辺ニおいて鯨漁いたし来候⁽¹⁷⁾」と、フランス船の鯨捕りが日本近海で行われているので、

日本海辺ニおいて此末万一難船ニ逢ひ候節御扶助之程偏ニ奉希候

右等之難ニ逢ひ候者有之候ハ、御仁恵を以御扶助之御陰を以其国ニ廻歸いたし候様御配慮被成下、年々長崎迄商の阿蘭陀船又ハ唐船より御差返し被成下度奉希候

と、難破した折の救助と本国への帰国の手立を講じるように求めていた。

琉球への外国船来航についての情報を入手していたことから、フランス船三艘の長崎来航は、列強の進出が長崎でも現実になったことを認識さすものであった。

天保十五年（一八四四）七月二日にオランダ軍艦バレンバン号が長崎に来航したが、これについては、六月十七日に来航したオランダ通商船より知らされていた。ただ軍艦であることから、その偉容に驚かされ、大きな騒ぎになり、西洋の進出を実感させるものとなっていた。この状況下での通告なしのフランス船三艘の来航は、さらに緊張度を増すものとなったとみなされる。

（三）五島沖・対馬沖の外国船情報

弘化五年（一八四八）に米倉権兵衛から廻達写が出された。

一筆啓上候、五嶋左衛門尉殿領内柏村より西戌之方九厘程之沖合ニ異国船体之大船三艘外ニ拾五厘程之沖合ニ同

一艘去月十二日巳之刻より相見候付、領内浦ニ至迄兼而相備置候儀ニ者御座候得共、猶又嚴重為手当候處、同夕甲ノ下刻比ニ何連も子之方江乗放帆影相見不申段同所遠見番所告来申候、右之趣井戸対馬守殿江在所家老共より去ル朔日飛札を以御届申達候旨役用達より廻状を以為知来候段、御屋代共申達候此段為可申越如此御座候、
恐惶謹言

と、五嶋沖に異国船四艘が来航してきたことを告げる書状が四月三日に出されている。また、同日には対馬沖にも異国船が現われたことを知らしている。

一筆啓上候、先月十三日方同十五日迄三日之間、対馬西海沖合ニ追々異国船都合拾艘相見、何連も北ニ向乗去候、尤海岸浦之警衛之備有之候由、委細別紙之通井戸対馬守殿江以飛札被申述候段彼聞役方回状を以為知来候ニ付、右写両通差越申候、比段為可申越如此御座候、恐惶謹言

とあり、対馬沖にも異国船が現われた旨が記されている。異国船の情報集めが行われている。

四月四日にも米倉権兵衛は廻達写を出している。

一筆啓上候、先月十六日方翌十七日迄追々異国船七艘対州西海地方近ク致通船候段、委細別紙之通井戸対馬守殿江飛札を以被申述候段、彼聞役方廻状を以為知来候

と通知してきている。⁽²¹⁾

四月十一日には

去月廿九日巳之中刻比対州伊奈村と申所之沖北西之間ニ三本檣建白帆数多掛候異国船壹艘相見

と、三月二十九日にも異国船が対馬沖合に出現したことを知らしている。また四月七日にも現われたことを「一昨

七日巳ノ中刻比豆酸村西沖南西之方ニ三本檣白帆数多掛候段壹艘相見」と告げ、八日にも「昨八日辰之刻比伊奈村

沖西之方六厘程之所江三本檣白帆数多掛候船式一艘相見」と二艘が沖合に来たことを知らしている。⁽²²⁾

五月九日の廻達写では「去月十六日未ノ上刻比対州豆酸村冲南西之方ニ白帆数多懸候異国船一艘相見⁽²³⁾へ」と十六日にも現われたことを記している。

五月二二日の廻達写では

去月廿九日北風霧深ニ候処卯中刻比晴間相成対州東海鴨居瀬村と申所之地方⁶式里計之冲合ニ異国船老艘長サ六拾間程三本檣白帆数多掛候船漂居候様子ニ相見候処⁽²⁶⁾と、四月二十九日にも現われたことを告げている。

(四) 津軽沖の異国船情報

嘉永元年五月十五日の廻達写には「津軽越中守殿⁶之御届書附写⁽²⁷⁾」として、津軽沖に現われた異国船についての書状写が収納されている。

三月九日松前西ノ方之湊^{湊ノ名}小嶋有之所江異国船繫船いたし三之手迄出張有之、と三月九日に松前沖に異国船が現われたことが告げられている。

三月二十二日の書状では

私領分三馬屋遠冲江一昨廿日昼四ツ時通船嵩凡三千石積位檣三本立申候異国船式艘相見とあり、三月二十四日の書状でも

一昨廿二日御届申上候領分三馬屋并母良月遠冲江渡来之異国船五艘地方より沓里内外近寄候と五艘の外国船が現われている。

嘉永元年（一八四八）五月二十五日づけの「南部信濃守殿松前志摩守殿⁶之御届其外写⁽²⁶⁾」が収納されている。

去月廿日三厩⁶上江半道先藤崎と申処之冲江異国船五艘滞船、同廿六日異国船⁶石火矢を放シ候付、藤崎之者と

も怪俄人者無御座候得共、大驚老若男女共ニ山林江逃去、異国船より小船を下シ百五拾人計上陸仕候付、三厩御陣屋人数出候ニ付、異国人乗船仕候由、同廿六日迄同所ニ滞船、昼比不残出帆仕候由、是迄来候船者漁船と相見得候得共、此度之船者イギリス船ニ而海賊と申唱ニ御座候、前文之趣早打を以津軽様江注進時々刻々仍而御人数被差出候由

とイギリス船が五艘現われ、大砲を発射した由が記されている。

三月十日の南部信濃守の書状では、

私居所辰巳ノ方ニ当冲合三里程隔り昨九日未ノ上刻比船嵩碇と不相分凡千石積位檣三本帆数者相分兼候得共、帆相懸候異国船壹艘相見得

と三月九日に外国船が現われたことを記している。

三月二十二日の書状では

領内大畑并下風谷村海岸より四五里程冲合去ル十七日午ノ下刻三本檣之異国船貳艘相見得

と貳艘の外国船が三月十七日に現われていることを告げている。

四月七日の書状では

領内大畑并下風谷村尻矢騎冲合江去ル二日巳ノ申刻頃三本檣之異国船三艘相見

と三艘の外国船の接近を通報している。

以上、主に弘化期における外国船の琉球、五島、対馬、津軽来航についての佐賀藩長崎聞役の情報入手の状況について若干検討した。琉球に関する情報は、薩摩藩の長崎奉行への通報に基づくものであったことから、佐賀藩が特に対策を講じている模様はみられない。しかし、外国船来航についての情報入手に努めていることは、五嶋、対馬、津軽への来航の模様を記していることにも表われている。

弘化期が外国船来航において一つの転期になっている。アヘン戦争による極東情勢の変化がここにみられる。

注(1) 「異国船記」に所収、(以下、特に記さない限り、史料は佐賀県立図書館架蔵の鍋島家文書による)。

(2) イギリス船サマラング号の長崎測量については、拙稿「幕末期佐賀藩の長崎警備と対外危機認識」(「佐賀大学経済論集」第三三巻五・六号合併号、二〇〇一年三月) 参照。

(3) (5) 「異国船記」。

(6) (18) 「フランス国之船三艘渡来ニ付而之一通」。

(19) (26) 「異国船記」。

(27)、(28) 「異国船記」に所収。

二、琉球への外国船来航と島津斉彬

(一) 弘化二年について

琉球へのイギリス船やフランス船の来航で緊張が高まったが、島津斉彬がこの頃にどのような対外認識を持っていたかを検討しておこう。

弘化二年(一八四五)五月二日に斉彬が水戸の徳川斉昭に呈した書翰には、イギリス船来航について、次のように記している。⁽¹⁾

扱琉球之儀、如命誠ニ不一方心配仕候、去ル三月十六日便ニも未タ跡船役も不相見得段申来候、異人之様子、且つ申掛候趣意内密可申候得とも、今日者書取出来兼候間、近日中極内以直書申上候様可仕候とある。イギリス船の来航については、「不一方心配仕候」と大いに心配している。

同年十月十二日には

仏船当年可参候間、篤と及示談候而、帰国之義取計可申との事ニ御座候、其外者英船兩度薪水所望ニ著船仕候計リニ御座候

と、フランス船とイギリス船の来航について記している。外国船の来航に氣を使っている。このようなことから、十月十三日の書状では、「当年者是非炮術之新書取寄候筈ニ仕置候間、長崎方参次第、早々申上候様可仕候」と⁽³⁾炮術に関する外国書を長崎より入手する手配をとったことを告げている。外国船の来航に対応するために軍事書の入手に鋭意留意するようになっていく。これは同じ書翰の中で海上砲術書のことについて

昨日之ゼー・アルチルレリーハ余程珍敷和解書ニ御座候間、御沙汰次第ニ、四五冊ツ、差上候様可仕候、全部三十冊ニ御座候

と記していることにも現われている。

軍事書への関心が高まっていることは、十一月七日の書状で、海上砲術全書について「有馬筑後懇望ニ而借用致写候事ニ御坐候」とあり、久留米藩主の有馬頼永が借用していることを記していることから窺われる。⁽⁴⁾

(二) 島津斉興の官位申請と島津斉彬

島津斉彬が弘化三年（一八四六）三月に提出した島津斉興の昇任願いについて検討しておこう。

島津斉興の官位昇進について、外国船の琉球への来航と琉球王への対応で上申書が出されている。これは琉球への外国船の来航が琉球統治に影響を及ぼしていることを示すものであった。

弘化元年三月十一日に琉球に来航したフランス船について、

一昨辰年琉球江仏朗西国之船来著、和好交易教法之儀申掛候付、琉人共方程能為申断候得共、乗組之内兩人残置、

追而大總兵船可渡来旨申置致出帆、其後右両人^⑤と茂通商等之儀申掛候得共、一途ニ申斷、未両人者致滞留居候と、フランス船の琉球来航について記し、通商を求めたこと、二人を残して出帆したことに言及している。フランス船の来航について記した後で続けて、次のように記している。

然者西土之儀、近来段々航海之道開ケ立、諸方未審之地迄茂致渡海交易、又者商館等取建候向ニ御座候由^⑥と、西欧諸国が航海に力を入れ、未知の所にも出掛けて交易を求めていることに言及している。外国船の来航が常態化する事態にあるとの認識になっている。そして琉球のことについて、東洋での通交では便利な地にあることから、近年ではイギリス船やアメリカ船が沖合まで来航するようになったと指摘した上で、

琉球之儀全体清国之封爵を受、朝貢いたし来候国ニ御座候得者、彼方江対シ為致遠慮^⑦ニ茂為有之筈候得共、阿片之一条^⑧と映人と及戦争、終ニ者清国^⑨と納金を以和好之約定相成候哉ニ承及事候得者、其以来国威茂相折ケ候処^⑩と、琉球は清国に朝貢してきたこともあって、清国には遠慮する状況にあるとし、アヘン戦争によって、清国が破れ納金することによって和平が整ったが、清国の国威は衰退するようになったので、琉球周辺にもイギリス船などが来航するようになったとしている。一八四〇年（天保十一）にイギリス軍が清国に侵攻し、厦門・舟山・上海なども占領し、四二年（天保十三）八月に南京条約を結び、賠償金を清国に支払させたアヘン戦争によって、清国に対して「国威茂相折ケ候」と認識を転換していることが出ている。この清国の衰退が琉球への外国船の来航をもたらしたとの認識になっている。

外国船の琉球進出によって、「西洋人共利害を説示し、琉人共之人氣致一変候儀共有之候^⑪而者一大事之訳ニ候」と西洋人の意によって琉球人の気持が変わるようになれば一大事であるとしている。アヘン戦争によって、琉球をめぐる状況が転換し、従来のような琉球支配が維持できなくなる危惧を持つようになっていく。そして近年は琉球に

対して「偏ニ恩義を以異心を不差起方ニ懷ケ置申候」⁽⁹⁾と恩義によつて異心を起こさないようにしているが「慈愛而已ニ流レ、却而者威令薄方ニ成立候」⁽¹⁰⁾と恩義や慈愛だけでは威令が薄まり、新しい対応が必要だとして、島津斉興の官位昇任を求めている。

官位昇任が琉球支配に有効であるとする理由を次のように述べている。

今般從三位昇進被仰付候旨承知仕候ハ、其段琉球江申越候得者如先規為祝儀可致上国候付

と、⁽¹⁰⁾島津斉興に從三位が与へられ、それを琉球に通報すれば、先例に從つて祝いのため上国するだろうとし

其節可申渡趣者、今度格外之奉蒙御殊遇候付而者、推恩之訳を以中山王会釈之格式一等相進、摂政・三司官共ニ茂右ニ準加級申渡候ハ、琉球之儀海嶋之事ニ者御座候得共、年々清国江使者差渡、於彼国官位之次等、衣冠之壯麗等見馴罷在候付、致而感服可仕

と、⁽¹¹⁾官位昇任で特殊な処遇に浴すことによつて、琉球王などの格式も上げるようにすれば、琉球は清国に毎年使者を出しているので、清国の官位の在り方などを承知していることから、大いに琉球王などは感服するであろうとしている。そのようになれば

左候得者、公義奉仰御盛恩、次ニ者大隅守江難有被仰付候余光別而美目罷成、中山王初、摂政・三司官其外末々ニ至リ、弥恩威ニ服シ、譬西洋人共方何様申論候共、決而相靡申儀有之間敷

と、⁽¹²⁾幕府や島津氏に対して恩義を感じ、琉球王を始めとして末々まで恩威に服するであろうとしている。このようになれば、「譬西洋人共方何様申論候共、決而相靡申儀有之間敷」⁽¹³⁾と、たとえば西洋人が色々云つてきたとしても、これに從うようにはならないとしている。もしそうでない場合は、

琉球之儀誠之孤島ニ而、天性柔弱ニ有之、要害之固、兵器之備全ク無之、其上五穀薪水共ニ乏敷、加之七島灘より琉球迄之間、至而荒波御座候得者、国元方差渡候船々茂、一節限り致往来事ニ御座候得者、船中之働調兼候付、

西土之戦艦江対し、防禦之術無之候付

⁽¹⁵⁾と、琉球が孤島であり、兵器もなく、薪水も乏しいとし、海上は荒波なので鹿児島より派遣の船も十分な働きがでないとし記して、西洋との戦争になれば防禦の方法はないとしている。西洋の進出に対して、琉球が対抗できない状況にあると述べている。

琉球が侵された場合は

商館ニ而茂相建、諸国互市之湊ニいたし、日本之隙を窺ヒ候様ニ共有之候而者、乍恐天下之御安危ニ相掛候儀と大隅守者勿論家来共ニ茂寝食を忘、心痛仕

⁽¹⁶⁾と、外国が商館を建て、諸国の交易の場とし、さらには日本を窺うようになるので、島津斉興を始めとして家来も大いに心痛していると記している。琉球が侵略されれば大変な事態になると危機を強調している。このようなことに対応するためには、

御寵遇之以御威光、琉球之人心を結ヒ、且者領内旧族之家来共ニ茂余多罷在嶋方并海岸領地為致来候者共茂御座候付、一統猶以御高恩之程難有為奉存、只管武備相励、乍不肖西海之押へ罷成候様、尽忠勤度念望奉存候

⁽¹⁷⁾と、幕府の威光をもって琉球の人心を結び、さらに領内の警固を強め、西海之防警となるように努めるとしている。このように記したあとで

件之趣被聞召届、大隅守願之通、從三位昇進被仰付被下度、私々茂分而奉願候事⁽¹⁸⁾と、島津斉興の從三位昇進を願っている。

以上のように、アヘン戦争と琉球について言及し、アヘン戦争によって清国の威光が劣へ、西洋船が琉球に進出するようになり、これが琉球に対する旧来の支配秩序を乱すことになったとしている。琉球が侵され、交易の地となれば、大変な事態になるとし、これに対応するためには、島津斉興が從三位に昇進し、それに伴って琉球王な

どの格式を上げれば、その恩寵を感じて結びつきが保てるという認識を示している。

官位昇進をアヘン戦争と琉球問題を基軸に申請していることに特徴がある。アヘン戦争による東アジア秩序の変動が大きな影響を与えていることが窺われる。

注(1) 島津斉彬文書刊行会『島津斉彬文書 上巻』(吉川弘文館、一九五九年)八頁。

(2) 同書一〇頁。

(3) 同書一二頁。

(4) 同書一四頁。

(5) 同書二三～二四頁。

(6) (11) 同書二四頁。

(12) (15) 同書二五頁。

(16) 同書二五頁～二六頁。

(17)、(18) 二六頁。

三、佐賀藩の対応

(一) 弘化元年について

弘化元年(一八四四)における佐賀藩の外圧に対する対応を検討しておこう。

四月二十日に御番方より長崎奉行所届草案が作成されている。

蘭船持渡大銃之内モルチール筒砲挺此方領内海防為手当取入之儀奉願候処、代銀納者追而御無沙汰可被下、先可受取置旨被相達候趣国元申越候処、役人共承知之難有奉存候、右ハ此方箇方之者共稽古打試、其上ニ而領内伊王

嶋相備積ニ御座候、就而者右島へ兼而相備置候自分筒一同居置一手限相備義ニ御座候、此段被御聞置候様国許役人共申越候

とある。⁽¹⁾ オランダ船が持ち運んできたモルチール砲を一挺買い入れ、稽古をした後に伊王嶋に備えるとしている。

鍋島直正は四月二十日に長崎に赴き、二十三日に長崎奉行と面談し、二十四日には長崎番所を巡見し、さらに香焼島まで視察を行った。

五月五日には「今船於御手許炮術被相整候ニ付役所被相建御火術方と相唱候様⁽²⁾」と火術方を設けた。

五月十二日には「御家中扱又農工商之義市中郷村致雜居候而者自然と風俗ニも差構⁽³⁾」として農商分離政策の方針を示した。⁽⁴⁾

農商分離政策は、農民を中心とする郷村秩序の維持のためであり、農民安定化を目指すものであった。年貢米中心の藩財政運営にするためには、農民が安定し、年貢米上納が確保できる体制を維持する必要がある。表方財政を年貢米を基軸にしたものにして、小物成や新田地からの収納は特別会計の懸硯方財政にて行うという体制づくりを目指した。

外圧に対抗するためには、軍備の増強が必要になり、それには多額の資金を必要とすることから、藩財政についての検討を行い、一般会計としての表方財政は年貢米を中軸に、軍事費などの調達には、特別会計の懸硯方財政を充実して遂行する体制を構築しようとした。これは基本的には、藩初からとられてきた政策であったが、年貢米収納量が固定化し、他方では商品経済の発展によつて支出が増加してきたことから、この政策を維持することが難しい状況になっていた。年貢米中軸の体制を保持することは、支出抑制になりいわゆる緊縮財政になる。生産力の発展成果を懸硯方に集積するということは、軍事力強化のために、生産力発展の成果が用いられるということであり、ここに軍事力強化がもたらす特質があった。

領内では農商分離の体制づくりが行われ、地方では火術方を設けて大砲製造を進めている。

六月十日には「今般於御側御鑄立相成候左之御筒御武具方引渡候様被仰付⁽⁵⁾」と野戦銃一挺、モルチール二挺が台付きで武具方に、台付きのホーイスルー挺が深堀に渡されている。

鍋島直正は六月二十日に長崎に赴き、長崎奉行と会ったのち、番所と神埼台場を巡見して二十七日に帰城した。

七月二日夕方に外国船が長崎に来航したことから、長崎聞役の米倉権兵衛からの通報があった。このため鍋島直正は七月四日に長崎に向い、八日には番所と女神台場を巡見した。

オランダ軍艦バレンバン号の来航のことは、バダヴィアから六月十五日に長崎に入港したオランダ船から、オランダ国王の国書を持参した特使が来航する由を知らされていた。六月十七日には、特使来航の旨が福岡藩長崎聞役桐山市郎太夫に長崎奉行井沢政義が

此度渡来之阿蘭陀咬啗吧頭役ヨリ「カピタン」江差越候内、阿蘭陀国王ヨリ御政道筋御為ニモ相成儀可申上旨ヲ以、彼方従本国商売船ニ無之、態ト船相仕差越候段「カピタン」申出候

と伝えた。⁽⁶⁾長崎警備の関係から、佐賀藩にも通知されたとみられるので、オランダ国王特使が来航する旨は知っていた。

オランダ軍艦バレンバン号は七月二日に長崎に来航したので、長崎奉行伊沢政義は桐山市郎太夫に警備について指示を出した。

先達而申達候阿蘭陀本国仕立之船一艘入津ニ付、高鉾辺ニ為相繋置、主従之者出島之上、国王書翰並貢物献納方等申出、殊外ニ疑敷不相聞候間、追々右船湊内ニ挽入可申付候

と、軍艦来航の事を知らせ、港内に入れる手筈について指示している。バレンバン号への対処については「平常商賣船入津中ニ見合⁽⁸⁾」と交易船と同じように扱い「諸事不目立尤御取計可有之⁽⁹⁾」と荒立たない警備体制を講じるこ

とを指示している。

佐賀藩にも同様の通報が行われたとみられるので、オランダ軍艦バレンバン号来航のことは予知されていた。

幕府は文政八年（一八二五）二月に出した異国船打払令を出したが、アヘン戦争での清国敗北の情報に接し、天保十三年（一八四二）七月にこれを撤回し、外国船に対して薪水・食糧を供与する政策に転換していた。この方針に従って、オランダ軍艦バレンバン号に対しても穏便に対応することを長崎奉行伊沢政義は指示していた。

このような状況下において、バレンバン号が来港した折の対応を佐賀藩の城原鍋島家について検討しよう。

この度のオランダ船の来航が日本の政治体制に関する申し入れであったことを、佐賀藩上層家臣も早く入手していた。城原鍋島家の日記には、弘化二年七月二日に、次のように記されている。

一今日七ツ半過比白帆注進被有之候ニ付而即御登城、御退出夜五ツ比、右ニ付而寺てハ早鐘突出、尤此節之船阿

蘭陀国王より日本御政事之御為を申述ンため使者差遣候趣最前入津之阿蘭陀より相達候趣ニ者候得共、旧例も

なき御事歟且如付之船屋御安心不相成候ニ申段、御嚴重之御仕と相成居候故歟合図之鐘在、乞請伝へ候由ニ而、

市中郷村殊之外相騒キ候由ニ而城原下津宅より御家来夫、多勢駈付候趣相聞候付

とあり、オランダ船の来航が捉えられている。この度のオランダ船の来航においては、オランダ船以外の外国船が来航した折に打つ鐘突が行われている。このため「市中郷村殊之外相騒キ」と一大騒動になっている。城原鍋島家の家臣などが駈け付けている。しかし、藩の基本方針は、長崎奉行の指示もあったことから、行々しい対応策ではなかった。外国船来航を知らせる鐘音を聞いて早く駈付けた者に対して「直ニ差返シ、跡付之面、御屋敷不罷出通惣而此度之義右様騒動不仕様申遣候」とある。⁽¹¹⁾異国船打払令の撤回によつて荒立てない方針がとられたが、その指示に従って行動していることが窺われる。

続けて次のように記している。

一 右ニ付御与内方も荒々出席有之事

一 右ニ付山城様即刻長崎御出立ニ付御暇乞ニ担那樣御出被遊び、尤夜四ツ比山城様御門前ニ御通りニ相成候事
一 担那樣明日長崎御越被遊筈ニ付而左之通渡方有之候

一 銀七拾三匁分三厘 御納戸方代金壹両貳朱

左者御往来路銀其外

一金五両三歩

一 銀札拾匁五分 銀藏より

一 一セ二五十七文

右渡方之儀御備方附役之手明鐘杯心配ニ而受取差遣被申候事

と七月二日の動きを記している。⁽¹³⁾ 城原鍋島家が総括する組の者も集まっている。三日に長崎に出掛けることから路銀も出されている。

七月三日については、以下のように記している。

一 今日五ツ比長崎御出立、為御物副者担那樣ニも御出、御供次郎助・佐助御仲間音吉・庄藏也、尤此節ハ御備

立方御用筋ニ御出之由ニ付而、御鐘壺本御具足櫃一荷御口壺荷御持セ為心遣武士其外厘外迄行具足櫃等為持先

ニ罷出候、偕又御船中行弁当用にしめ物二種いもじ御酒差遣候、一鉢腰兵糧之格也、尤御側領頭方永山十兵衛

殿御備立方附役石丸権兵衛御同船ニ相成、御供船迄式艘之由也

一 御出立付高木源助様・関勝作様・庄野半允殿御出相成候事

一 長崎御留守中之儀八幡社・松原社江所代参被仰付候、今日武士相勤候事

一 利生院罷出、自然之節長崎御供之義五郎右衛門迄相願被申候事

と、長崎に向けて出立した模様を記している。鎗、具足、諸道具を持参している。

八月六日にはオランダ式銃砲を一〇〇挺製造することを「新製被仰付式武具方被相用義⁽¹⁵⁾」と御備立方で取り組むことになった。

鍋島直正は九月十五日に長崎に向い、十八日には長崎奉行所に出掛け、十九日には西番所を巡見し、二十四日に帰城した。この折にオランダ軍艦バレンバン号に乗艦し同艦を見分した。また十月十四日に長崎に出立し、二十二日に帰城している。

十月十三日に岩田において火術方の訓練を直正は検分した。

十月十六日に御番方から、次のような伺いが出された。

長崎御番手之儀、格別之勤柄ニ付而者厳密勤番御手配向をも於現地精々讃談習熟候様無之而不叶候處、是迄之通諸組不撰ニ被差越候而者軍令等之申談届兼候上、頭々之支配も詰中一課ニ而夫々難行届ニ付、以来者諸組之内方二組ツ、西泊、戸町の立別れ御石火矢頭人始役々之外者番頭已下其組一手之内方被差越、物頭之義者手組引連罷越可致申談を以厳密ニ勤番、壮年之面々者稽古方を始、土地案内之ため一ヶ年詰被仰付置候處、先般使節船入津ニ付而者両組方物頭已下多人数増番等被差出、数十日夜白共別而勤勞有之、右ニ付而ハ内分不少雜費之筋も有之候ニ付、

とある。長崎警固の体制の変更を願ひ出たもので、諸組より人選して派遣していたので軍令も行き届きかねていた。⁽¹⁶⁾それゆゑ諸組の中から二組詰として西泊と戸町の番所に詰め、組の手配は組頭が行い、しかも一ヶ年詰めとしたと記している。続けて次のように綴っている。

打迫一ヶ年詰ニ而者足輕鉢少身之者共ニ者農業等差欠罷越其外永詰ニ而者召仕等之手締行届兼候儀有之由、右之兼々者不差支通何連とも取計之道可有之哉ニ候得共、一体香焼詰之人々と相違、番頭以下組足輕迄老若入交之詰

方ニ付、稽古方等一課者届合候而も始終致連続兼其上内輪難渋有之故ニ候哉、壹ヶ年と候而者人氣引立兼候哉ニ相聞、右者専組内差引ニ相掛候事柄ニ付、大組頭中考量も可有之ニ付、間合候処、御場所柄勤之義ニ者候得共、壹ヶ年ニ相及候而者色々難渋之儀等有之、御主意通差引付方届兼候ニ付相成儀ニ候ハ、半ヶ年詰ニ被仰付度、左候半者人氣も相進ミ御主意行届候通ニ者猶又於組々指引可相整旨申立候、就而者一応被相決置たる義ニハ候得共、永末ニ相懸候儀ニ而人氣不進之ニ而者御更張之詮無之儀ニ付、今又半ヶ年詰被相改方ニ者有御座間敷哉と吟味仕候、其通於被仰付者交代被差越候ハ組之義者追而可申上候、此段奉伺候と一か年詰めでは組内の者で農業に従事している者もあり、農作業に支障をきたし、また出費も多いので半年詰めにしてほしいという願ひであった。オランダ軍艦バレンバン号が七月二日に長崎に来港し、十月十八日に出港した。この警備のために「両組方物頭已下多人数増番等被差出、数十日夜白共別而勤勞有之」と増員が行われ、数十日の長崎滞在になつていたことから難渋する者が出ていた。佐賀藩では足輕層は農業に従事する者が少なからずいた。このため長崎での長期滞在は農作業にも支障を生じるようになっていた。長崎警備を強めるために、一か年滞在の方針が出されたが、これは足輕層には大きな負担をかけるものであった。そのため半年詰めにすることを要望する事態になつている。外国船の来航が増え、そのために警備体制を強めざるをえなかつたが、それが藩内の矛盾を強める作用を及ぼしていた。

(二) 弘化二年について

弘化二年（一八四五）二月十日に、番方から長崎警備体制の強化について、福岡藩との協議をすすめる手立について伺ひが出された。¹⁷

当湊御備伺之義、去ル文化之度異船渡来後、新規御台場御築立其外如形御手当増相成居申義ニハ候得共、去夏阿

蘭陀本国仕立之船渡来且琉球之振合等を以ハ何時異変出来之程難計、惣而西洋之儀火術事ニ而追年窺口經驗を以益大砲等相用候趣之是不容易風説等も有之旁ニ付而者、御備向之儀猶此上ニも利用之計者有之間敷哉、役人共ニも重畳逐吟味候得共、平常之場ニ而格別御備向等相増候義幾、連続之程も難計候得者、何分其通ニも取計兼、然共当折柄ニ付而者臨之期猶又口利宣通ニ者取計置度、依之於此方存寄之大旨不客別紙廉書差遣申候、於其許様御考量之筋も可有御座候得者と御打合仕度御座候条、御存寄之程無御用拾為御知被下度候、此段先以御自分様迄宣及御談候様国許方申越候、已上

とある。⁽¹⁸⁾長崎警備の体制を強めるために福岡藩に対して相談する手筈を進めている。オランダ軍艦バレンバン号の長崎来港や琉球へのイギリス船、フランス船の来航などで外国船の出没が今後多くなることが予想され、また、外国船の軍備強化の状況からして、長崎警備を増強する必要があると認識している様相が窺われる。長崎警備について新しい段階を迎えている。

長崎警備の増強を福岡藩に申し出た背景には、オランダ軍艦バレンバン号の長崎来港、鍋島直正の同艦乗艦による装備と訓練の視察によって、西洋軍事力の偉力を実感したことによるとみられる。これまで直正は度々長崎に赴いているが、長崎警備体制を増強する志向は明確には示していなかった。

バレンバン号は大砲を少なくとも四〇門は装備しており、当時の製砲状況からして鉄製大砲も配備されていたとみなされる。毎年長崎港に来るオランダ船は商船であったことから、軍艦に対する認識は深くなかったとみなされる。軍艦の装備を知る必要性を痛感し、乗艦を強く長崎奉行に願ひ出た態度に直正の意向が現われている。前例がないことから長崎奉行は容易に承諾しなかったが、長崎警備上からも必要性を強く説き、直正は乗艦を認めさせている。この直正の意向からして、軍艦バレンバン号の乗艦による視察は大きな衝撃を受けたとみなされる。

三月五日には水ヶ江茶屋で香焼島詰の者の槍劔を検分し、同月十一日には岩田で火術方の放射を視察している。

同月十七日には番方から次のような伺いが出されている。

当御非番御仕組之義、一鉢者前御非番被相寄御手配可相成候得共、風説之次第を以者聊御油断難被相成臨期御人数被差出候通ニ而者御手配難行届、就中異船渡来之差付諫早・深堀人数を以御非番所御受取之御楯組ニ付而者去ル文化之度之御見合も有之、旬季中左之通深堀詰被仰付方有御座間敷哉

とあり、非番時の体制を強化することを求めている。「異船渡来之差付」と外国船来航が多くなるとの認識が強まっており、これまでの諫早と深堀の人数だけでは、非番の折も不十分なので、鍋島孫六郎の外に石火矢頭人、番方付役、武具方などを深堀に詰めさす体制をとることを求めている。

四月二十九日には、直正は本庄江尻で香焼詰の者による櫓こぎと火術方船中炮術を検分している。

佐賀藩は洋式軍備の増強を目指して、外国銃の買い入れを願っている、五月二十六日に次のような書状が出されている。

阿蘭陀船方近年持渡候異国新製之筒類者武備口利之趣ニ付、当湊非常之御節ニも相用度候ニ付、御壳渡之儀兼而奉願置候処、先般江府御伺之未釦付筒等御壳渡被成下候様御達之趣難有奉承知候、就而者此節会所御固之内先以釦付筒百挺其外カーカル筒十挺、騎馬筒五挺此方へ御下渡奉願候、将又同断筒類追々紅毛持渡候都合ニ寄尚又可奉願候

と、オランダ船が運んできた外国製武器の壳渡を申請し、それが認められたので、釦付銃一〇〇挺、カーカル銃一〇挺、騎馬銃五挺の下渡を願っている。長崎の防警体制の強化を計っている。

六月二日には塩硝を確保することを国産方に命じている。

七月五日にイギリス船が長崎に来航したので、直正は八日に向って出立した。十二日には外目台場を巡見した。

八月三十日には番方から、非番の折に異変が起った場合には、大砲打ちの人数を八二人直ちに派遣するようにし、

その折に番頭二人、石火矢頭人、物頭二人が駆けつけるようにする伺いが出された。

福岡藩主黒田長濤が長崎巡見後、佐賀に立ちより、鍋島直正と面談し、長崎防備について検討した。

十月二日には鬼丸調練屋敷で火術方の銃陣を検分した。

十月五日には長崎の警固で福岡藩との協議について番方から伺いが出された。

長崎表御備向御潤色一件ニ付而者御双方懸り之役、於長崎表致出會、現地之振合ニ寄り廉、示談可相成、右示談方左之者共被仰付方有御座間敷成奉伺候

と伺いを出し、番方相談役格兼帶の田中半右衛門と同附役兼帶の高木持太夫の任命を申請した。

福岡藩との示談を開始する前に伊王嶋などの台場の地形見積りのために、鍋島志摩等を派遣した。従来、大名相互が領国で会合することは幕府によつて禁止されていた。鍋島直正は長崎警備を増強する必要があることから、イギリス船の来港に対して、弘化二年（一八四五）七月八日に長崎に赴いた折に、福岡藩主黒田長濤と佐賀で面談することを約束したことに基づき、幕府に認詞を申請し、それが認められたことによるものであった。

十二月二日には番方から次のような達が出されている。⁽²³⁾

御備向御潤色一件於長崎表筑前役ニ御打合ニ付而者、御石火矢頭人者内輪ニ出崎伺之末申達置候処、此節筑前と照合之趣を以石火矢役頭取兩人出役之由ニ付、原次郎兵衛義表向罷出候通申達候旨、御番方伺之通被仰付、其末同人と手覚書差出

とあり、福岡藩との示談の前に台場のことなどを検分する体制をとり、役人を派遣している。

十二月三日には番方からの伺いが出された。

一此節可被相増筒数相尋候半者凡百挺位ニ而も可有之哉ニ相心得候段相立可然哉

一玉目之義相尋候ハ、外目矢遠之場所ニ付、貫目已上之御筒ニ無之而者相叶間敷、尤場所ニ依五貫目位之御筒

ニ取加御備付相成方ニ可有之哉ニ相心得候段相含可申哉とある。⁽²⁴⁾増台場において必要な大砲は一〇〇挺ぐらいであり、玉目も一貫目以上のものが肝要であり、場所によっては五貫目ぐらいのものがいると返答するとしている。

一玉薬放数且御囲場所等相尋候ハ、大図在来見合ニ御取計無之而相計間敷哉ニ相心得候段相答可申哉とあり、玉薬の放出数については、在来のようにするとしている。

一内目御備付御筒之義者、打追被成置候御積ニ候哉相尋候ハ、内目之義者矢近之場所ニ付、玉目小キ御筒ニ御差操等相成方ニ可有之哉相心得候段相答可申哉と、⁽²⁶⁾内目の防備の大砲は従前よりも小さなものに變更するようにしている。

一伊王島其外御自分御備筒之義相尋候ハ、地所相備候迄一通之御手当向候段相答可然哉と、⁽²⁷⁾伊王島など佐賀藩領に配備する大砲については、増台場ができるまでは一応の手当をするとしている。福岡藩との示談で対応が必要な事項が示めされている。外目の台場増強が基本になっている。

注(1) 「直正公御年譜地取」弘化元年四月二十日。

(2) 同、弘化元年五月五日。

(3) 同、弘化元年五月十二日。

(4) 木原涛幸『幕末佐賀藩の藩政史研究』(九州大学出版会、一九九七年)一〇六～一〇七頁参照。

(5) 同、弘化元年六月十日。

(6) 川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『新訂黒田家譜 第七卷』(文献出版、一九八四年)一三九頁。

(7) 同書一四一頁。

(8)、(9) 一四四頁。

(10)～(13) 「城原鍋島家日記」天保十五年七月二日。

- (14) 同、天保十五年七月三日。
- (15) 「直正公御年譜地取」天保十五年八月六日。
- (16) 同、天保十五年十月十六日。
- (17) 『鍋島直正公伝第三編』(侯爵家鍋島家編纂所、一九二〇年)一九九〜二〇〇頁。
- (18) 「直正公御年譜地取」弘化二年二月十日。
- (19) 同、弘化二年三月五日。
- (20) 同、弘化二年五月二十六日。
- (21) 同、弘化二年十月五日。
- (22) 前掲『鍋島直正公伝第三編』二二三頁。
- (23) 「直正公御年譜地取」弘化二年十二月三日。
- (24) ～(27) 同、弘化二年十月三日。

むすびにかえて

弘化前半期における状況を対外関係を基軸にして、佐賀藩と薩摩藩について若干の検討をしてきた。

アヘン戦争での清国の敗北は、従来の東アジア秩序に変容をもたらし、西洋列強の琉球と日本本土への進出度を高めた。異国船打払令が存続していたら外国船との衝突は避け難かったが、天保十三年(一八四二)七月に異国船打払令を幕府は撤回した。ここにもアヘン戦争の影響が見い出される。

佐賀藩は外国船の進出に対する情報入手に努めていた。主に佐賀藩長崎聞役からの通報であったが、この通報によって、外国船の動向を把握していた。頻度の高まった外国船の来航に対して、長崎警備体制の再検討が欠かせなくなってきた。

薩摩藩においても琉球支配の体制が崩壊しかねないとの危惧を持った時期であった。島津斉興の官位従三位の昇任申請において、島津斉彬が琉球と外国船との関連で申請理由を記していることにそれが現われている。清国への朝貢を認めながらも、薩摩藩に従属させている秩序の崩壊を危惧している。まさしく従来の東アジアにおける秩序の危機と受けとめている。琉球への外国進出は日本本土の危機に繋がるという認識は、従来の東アジア秩序が大きな転換を迫まられているという意識になる。それだけに琉球を重要し、官位申請において、琉球問題を中軸に論じている所以がある。この意味では、薩摩藩は対外的危機に対する認識を諸藩よりも強く持ったとみなせよう。

佐賀藩では、アヘン戦争後、外国船の偉力を見せつけられたのが、オランダ軍艦バレンバン号の来航であった。

オランダ国王の開国勧告の親書がもたらされたことに、新しい状況の展開がみられたが、軍艦の長崎来港は、軍事力の大きさを認識させられるものとなった。佐賀藩内では来航を伝える鐘が打たれ、軍艦の偉容が伝聞されて「市中鄉村珠之外相騒キ」という事態になった。この点からすれば、対外関係の変化をバレンバン号の来港によって印象づけられたとみなされる。長崎警備との関係でみれば、鍋島直正が同艦に乗艦し、装備と訓練を視察したことは、警備体制を見直す要因になったと解される。これは乗艦以後、外目の台場を増強して外目を防備の中心に位置づける政策が展開されていったことに裏付けられる。福岡藩主黒田長濤と会談し、長崎警備の増強の手立が講じられたことは、旧来の東アジア秩序の崩壊に対して、新しい日本の秩序を整えようとしたことを示すものであった。

弘化前半期は佐賀藩にとっても、長崎警備体制の見直し開始になったことからして、大きな転機の時期であった。佐賀藩と薩摩藩にとって弘化前半期は、転機をなす時期であった。アヘン戦争による東アジア秩序の崩壊が大きく作用している。幕府は弘化元年七月のオランダ国王の開国勧告に対して、弘化二年六月に拒否の返書を出したが、以後江戸湾警備の体制を強めていったことからして、やはり弘化前半期が転機になっている。

長崎警備という防備上で重要な軍役を担っていた佐賀藩は、まさしく外国と対峙する最前線の立場にあった。薩

摩藩においては、琉球を通じて清国と結びつき、東アジアの秩序の中に位置していた。佐賀藩と薩摩藩いずれもが弘化前半期に新しい対応を迫られたことは、旧来の東アジア秩序に替わる秩序の形成を促がすものとなった。西洋との関係で再編成を余儀なくさせられ、それが攘夷と開国をめぐる激動となり、劇烈な政治変動をもたらすことになった。このことからすれば、弘化前半期はまさしく激動生起の時期であつたと位置づけられよう。